

島毎の生態系保全の目標と方向性

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
父島	<ul style="list-style-type: none"> 父島は小笠原最大の面積をもち、標高 300m級の主稜部もあり、多様な立地環境を有しているため、小笠原諸島の全固有種数の 8 割以上(129 種)が生育し、広域分布種も多いが、一方では開拓や人為的改変、外来種の侵入に伴う影響も強く受けてきた島である。 乾性低木林(コバナアカテツ - シマイスノキ群集)が東平から中央山一帯はまとまった面積で、旭平から北西部の長崎付近にかけては帯状に分布し、林内には希少性が高い固有植物種も多く分布している。 父島では過去 60 年程の間に林冠を構成している種が入れ替わり、島の主体をなす植生が大きく変化してきた経緯があり、さらに今後も変化する可能性があるが、東部エリアの自然環境のコアとなる乾性低木林の分布には、現在まで大きな変化はみられない。 父島の植生は本来ムニンヒメツバキ自然林(ムニンヒメツバキ - コブガシ群集オガサワラモクレイシ亜群集など)が主体をなしていたと考えられるが、戦前に大規模な開墾により耕作地となり、戦後は人工林起源のリウキュウマツが侵入した。マツノザイセンチュウにより林冠のリウキュウマツが枯死した後、亜高木層にムニンヒメツバキが侵入していた場所にムニンヒメツバキ二次林が成立したものと考えられる。現在のムニンヒメツバキ二次林は、外来種のキバンジロウが中・低木層に侵入した混淆林(ムニンヒメツバキ - コブガシ群集キバンジロウ亜群集)を形成しており、台風等の自然攪乱で林冠のムニンヒメツバキを失った場合には偏向遷移が生じる可能性がある。 東平一帯では、アカガシラカラスバトが繁殖し、林野庁によりサンクチュアリも設定されているが、ノヤギ、ノネコ、クマネズミなどの外来生物の侵入による固有種への影響も指摘されている。 	<p>乾性低木林を中心とした父島元来の生態系の維持・増進【東平・中央山～夜明平・長崎】</p> <ul style="list-style-type: none"> 父島の生物多様性の保全上、東平・中央山～夜明平・長崎地域一帯の乾性低木林は、保全上最も重要な地域である。 外来種の集中的排除を範囲を定めて継続的に実施し、固有種の一部については保護増殖を行うとともに、周辺の森林についても自然林への正常な遷移を回復すること等により、乾性低木林を中心とした生態系を保全し、維持・増進していくことを目指す。 また、以上を通して、ウチダシクロキ、コバトベラ、アサヒエビネなどの固有種の生息・生育環境を保全していくことを目指す。 <p>ムニンヒメツバキ自然林を中心とした父島元来の生態系の維持・増進【東平・中央山～南部】</p> <ul style="list-style-type: none"> 島の中央部～南部に広く分布するムニンヒメツバキ二次林について、阻害要因を排除すること等により自然林への遷移を手助けし、ムニンヒメツバキ自然林を中心とした生態系を保全し、維持・増進していくことを目指す。 <p>アカガシラカラスバトの安定生息【東平・中央山】</p> <ul style="list-style-type: none"> ムニンヒメツバキ林生態系の保全・維持を進め 	<p>乾性低木林及びムニンヒメツバキ林の健全な回復</p> <p>健全な生態系を阻害しているノヤギなどの外来種の駆除を、優先的エリア排除 全島根絶の流れで戦略的に進めるとともに、元来植生に依存する固有種の適切な保護を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> 植生の健全な回復を促すため、植生に多大な影響を及ぼしているノヤギについて、長期的には根絶を目指して取り組む。 しかし、父島は広大であり、また、兄島や弟島への対応が優先されるため、当面父島においては、ウチダシクロキ、コバトベラ、アサヒエビネなどの希少な固有植物種などを保護するため、東平のアカガシラカラスバトサンクチュアリの周辺を取り囲むようにして、ノネコ・ノヤギの侵入防止柵を設置し、エリア内からのノヤギの排除を行う。 場合によっては農林業被害対策とも調整しつつ、ノヤギの密度を一時的に下げることにより、植物への食害影響を軽減することも検討する。 岩上荒原植生や乾性低木林に影響を及ぼすモクマオウ・リュウキュウマツは、長崎地域での駆除の実績を活かし、その他のエリアでの排除へと広げていく。 その他、アカギ、ギンネム、キバンジロウ等などについては、乾性低木林等の元来の植生への侵入状況や危険性を見ながら必要に応じ、集中的な密度低下など、順応的な管理を進める。 既に実施されている希少な固有植物種の保護増殖(人工繁殖と再導入)での取組などを元に、さらなる検討を進め、必要に応じた固有種の保護増殖と生息・生育地の確保等を進める。 アサヒエビネをはじめとした固有種の保護増殖、盗掘等の防止のための取組を強化する。 <p>アカガシラカラスバトの生息地の保全</p> <p>アカガシラカラスバトの重要な生息地である東</p>	<p>ノヤギ【エリア排除完了(～21年度末)】</p> <p>モクマオウ・リュウキュウマツ【エリア排除完了・拡大(～21年度末)】</p> <p>アカギ【エリア排除着手(～21年度末)】 ギンネム【短期的には特になし】 キバンジロウ【短期的には特になし】</p>

推薦後の短期目標として、(～24年度末)までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
	<ul style="list-style-type: none"> ・南袋沢の最上流部に位置する衝立山から千尋岩にかけての帯には小面積ながら乾性低木林(コバノアカテツ - シマイスノキ群集)がみられ、アサヒエビネ、オガサワラシコウラン、オガサワラグワなどの固有植物種の分布が確認されているが、これらに対するノヤギによる食害等も懸念されている。 ・父島にはかつて4種の固有陸産貝類が北部から南部まで広く生息していたが、1990年頃に定着した外来種ニューギニアヤリガタリクウズムシの捕食圧により、現在では生息地の大半で絶滅した。しかし、父島固有の種であるチチジマカタマイマイは南部においてかろうじて現在でも生息しており、その他にも貴重な陸産貝類が南部から東部の縁辺部に残されている。 ・南部には、かつて固有昆虫類が数多く生息していたが、グリーンアノールとオオヒキガエルの侵入・拡大に伴う捕食圧により急激に減少した。しかし、グリーンアノールの拡散が北部から進行したこともあり、他のエリアに比べれば、固有昆虫類の残存可能性は高いものと想定される。 ・島の南部には、八ツ瀬川(上流部)をはじめ、多くの水系があり、多様な陸水環境を有している。いずれも護岸など人為的環境改変がなされておらず、在来種で構成された小笠原本来の水生動物相が維持されている。とりわけ、オガサワラヨシノボリ、オガサワラヌマエビ、オガサワラカワニナなど固有水生動物の良好な生息域となっている。 	<p>るとともに、外来種影響を排除することで、アカガシラカラスバト及びその生息地を保全して、安定的な生息を目指す。</p> <p>陸産貝類などの固有動物種の安定生息【南部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ニューギニアヤリガタリクウズムシの侵入により固有陸産貝類は多大な影響を被りながらも、南部～東部にかけて依然として重要な生息地である。 ・一方で、グリーンアノールやオオヒキガエルは固有昆虫類に甚大な影響を及ぼしている。 ・以上のような外来種の影響の排除等により、チチジマカタマイマイをはじめとする多くの特徴的な陸産貝類などの固有動物種及びその生息地を保全して、特に南部～東部にかけて安定的な生息を目指す。 	<p>平一帯のアカガシラカラスバトサンクチュアリにおいて、優先的に阻害要因を取り除き、生息地として適切に保全する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後もアカガシラカラスバトサンクチュア리를維持するとともに、生息地の回復のため、ノネコ、クマネズミの駆除について検討する。 ・ノネコについては、アカガシラカラスバトを捕食している可能性がある一方で、クマネズミの増加を抑えていることが予想されることから、ハトの繁殖期に捕食行動などの挙動を示すものを限定的に捕獲するなどの対策や、ノネコの増加を防ぐための対策、そして東平のノヤギ・ノネコ侵入防止柵による排除エリアの設置を行う。 ・アカガシラカラスバトと餌が競合するクマネズミについては、父島の面積は広大であり、かつ有人島であることなどから、撲滅は当面困難であり、アカガシラカラスバトの繁殖エリアから排除することを検討するとともに、アカガシラカラスバトの餌を確保する手法などの検討を行う。 ・アカガシラカラスバトの個体数の増加を図るため、上野動物園での人工繁殖の取組も踏まえ、繁殖成功率の向上などを目指し対策を図る。 <p>陸産貝類相の保護</p> <p>まだニューギニアヤリガタリクウズムシが侵入していない父島南部での侵入防衛を優先的に進め、現存する陸産貝類相の保護を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現存する陸産貝類相の保護のため、現在の生息地である南部～東部において、ニューギニアヤリガタリクウズムシの侵入防止の技術的手法の研究を進め、エリア防衛を進める。 ・今後は、クマネズミの駆除を実施するとともに、生息地の確保と管理等を順応的に進める。 <p>固有昆虫相の保護</p> <p>グリーンアノールにより甚大な被害を受けている固有昆虫相を保護するため、当面はオオヒキガエルとともにエリア排除を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長期的には、グリーンアノールの根絶を目指す。 	<p>アカガシラカラスバト【サンクチュアリ設定】</p> <p>ノネコ【エリア排除完了(～21年度末)】</p> <p>クマネズミ【短期的には特になし】</p> <p>アカガシラカラスバト【人工繁殖】</p> <p>ニューギニアヤリガタリクウズムシ【エリア防衛着手(～21年度末)】</p> <p>クマネズミ(再掲)</p> <p>グリーンアノール【短期的には特になし】</p>

推薦後の短期目標として、(～24年度末)までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
			<p>しかし、父島は比較的広大であり、また、グリーンアノールの数も膨大であることから、当面、強い影響を受けている希少な固有昆虫などを保護するため、それらの生息地に保全・再生すべきエリアを設定し、防護柵を設け、<u>オオヒキガエル</u>とともに、トラップなどを用いて排除を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エリアは順次拡大するものとし、将来の拡大を見据えつつ、計画的な設置を検討する。 <p>遺産区域外での対策</p> <p>小笠原の玄関口である二見港及び居住・農業地域において遺産区域への影響を最小化するために各種対策を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二見港周辺一帯において、<u>グリーンアノール</u>、<u>オオヒキガエル</u>、<u>ニューギニアヤリガタリクウズムシ</u>などの生息密度低下・拡散防止の取組を徹底する。 ・<u>オガサワラオオコウモリ</u>の農業振興と両立した適切な保全対策の検討及び適切な被害対策の検討と普及を行う。 ・<u>ネコ</u>をはじめとするペットの野外への拡散防止・適正飼養を行う。 	<p>オオヒキガエル【短期的には特になし】</p> <p>グリーンアノール【拡散防止の継続】</p> <p>オオヒキガエル【拡散防止の継続】</p> <p>ニューギニアヤリガタリクウズムシ【拡散防止の継続】</p> <p>オガサワラオオコウモリ【短期的には特になし】</p> <p>ネコ【適正飼養の普及啓発・飼養実態調査の実施】</p>
兄島	<ul style="list-style-type: none"> ・兄島には乾燥した岩屑土が広く分布して乾燥傾向が強く、他島と比較して立地環境の多様性は乏しいが、かつて定住者による広面積の開拓がなかったことから、外来植物や栽培起源の植物の侵入も少なく、生態系に対する攪乱の程度は他島に比べて低い。 ・維管束植物の総確認種数は230種で、そのうち固有種は、約41.3%にあたる95種に達し、主要5島中最も高い固有種率を維持しており、主に乾燥立地に耐性のある種により特徴づけられる。 ・台地上は乾性低木林（コバノアカテツ・シマイスノキ群集）が、凹地や谷底はムニンヒメツバキ自然林（ムニンヒメツバキ・コブガシ群集オガサワラモクレイシ亜群集シマイスノキ変群集）が占め、それぞれがモザイク状に入り組んだ状態で島内に広く分布し、その間をシラゲテンノウメ等が生育する岩上荒原植生や、風衝草地、タコノキ群 	<p>乾性低木林を中心とした兄島元来の生態系の維持・増進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人為改変や外来種の侵入による攪乱があまり見られない、乾性低木林を中心とする生態系が比較的良好なかたちで残されてきた島であることから、新たな外来種の侵入を防止するとともに、現存する攪乱要因を排除して、乾性低木林を中心とした生態系を保全し、維持・増進していくことを目指す。 ・また、以上を通して、アサヒエビネなどの固有種の生育環境を保全していくことを目指す。 <p>岩上荒原植生の生態系の維持・増進及びオガサワラハンミョウの安定生息</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主に中央緩斜面地や海食崖上に成立する岩上荒原植生を保全するとともに、植生保全を通してオガサワラハンミョウを含む生態系として保 	<p>乾性低木林及び岩上荒原植生の健全な回復、及びオガサワラハンミョウ生息地の保全</p> <p>乾性低木林は、小笠原を代表する重要な植生であり、その乾性低木林と混在する岩上荒原植生には、貴重な固有動植物種が生息生育している。このため、大きな影響を及ぼしている外来種の駆除を急ぎ、その保全を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乾性低木林、岩上荒原植生及びオガサワラハンミョウ生息地の健全な回復、コヘラナレンやウラジロコムラサキ等の固有植物の保護を促すため、<u>ノヤギ</u>の根絶を目指して、現在進めている駆除を継続する。 ・ノヤギとともに、植生に影響を及ぼしている<u>クマネズミ</u>について、根絶を目指して駆除を実施する。 ・岩上荒原植生において、特に拡大傾向が見られる<u>モクマオウ</u>・<u>リュウキュウマツ</u>については、 	<p>ノヤギ【根絶作業完了（～21年度末）】</p> <p>クマネズミ【根絶作業着手（～21年度末）】</p> <p>モクマオウ・リュウキュウマツ【エリア排除完</p>

推薦後の短期目標として、（～24年度末）までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
	<p>落などの極度な乾燥立地に成立する植生が埋めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・兄島の乾性低木林は、小笠原で最大規模である。また、特徴的な多くの陸産貝類や兄島固有のオガサワラハンミョウが生息しているとともに、コヘラナレンやウラジロコムラサキなどの希少な固有植物も生育している。 ・ノヤギが生息し、固有種の多くが食害を受けており、絶滅が危惧されるものもある。このため、東京都によるノヤギ駆除が行われている。 ・島の北部及び南西端の海食崖上や乾性低木林内には、同様に乾燥立地に耐性のある外来種であるモクマオウの侵入が見られ、在来植生を被圧している可能性がある。 ・グリーンアノールやニューギニアヤリガタウズムシの侵入は許しておらず、アジマカタマイマイをはじめとする陸産貝類相や昆虫相では小笠原本来の種構成を良好に保持しており、植物相も含め、島全体が父島列島における固有生物種群の遺伝子バンクと位置づけられる。ただし、外来陸産貝類、貝食性プラナリアの侵入が確認されており、今後が懸念される。 ・最近、陸産貝類の減少が見られ、この要因としてクマネズミや貝食性プラナリア等による食害が考えられる。 ・一方、兄島は、アカガシラカラスバトの生息地・移動経路となっている。 	<p>全し、維持・増進していくことを目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・また、以上を通して、コヘラナレン、ウラジロコムラサキなどの固有種の生育環境を保全していくことを目指す。 <p>陸産貝類やアカガシラカラスバトなどの固有動物種の安定生息</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外来種の影響の排除等により、アジマカタマイマイをはじめとする多くの特徴的な陸産貝類や、岩上荒原植生に生息するオガサワラハンミョウなどの固有動物種及びその生息地を保全し、安定的な生息を目指す。 ・また、兄島はアカガシラカラスバトの生息地でもあることから、生息地の保全及び安定的な生息を目指す。 	<p>オガサワラハンミョウなどの生息地保全に配慮しつつ、侵入の初期段階での地域的な完全排除を目指して早期に先行的な駆除を開始する。また、駆除に伴う生態系への反作用や土砂流出等にも配慮する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アサヒエビネをはじめとした固有種の保護増殖、盗掘等の防止のための取組を強化するとともに、複雑な地形と密な植生で捕獲困難なエリアにおいては、緊急避難的にノヤギから希少植物などを守るための防護柵の設置を行う。 ・その他、ギンネム、シチヘンゲ、ガジュマル等などについては、当面実態の把握と手法の検討を行い、侵入の初期段階で広範囲に分布が拡大していないうちに、根絶を目指して、早期に駆除を開始する。特にノヤギ駆除に伴い増加傾向にあるギンネム、シチヘンゲへの早期の対応を検討する。 <p>陸産貝類相の保護</p> <p>兄島は陸産貝類の貴重な生息地であるため、クマネズミ等の外来種影響を早期に取り除き、種の保護を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・陸産貝類の生息環境の回復のために、クマネズミの駆除を実施するとともに、生息地の確保と管理等を順応的に進める。 ・なお、駆除には困難が伴うと想定されるため、他の島での実績を上げながら取り組む。 <p>アカガシラカラスバトの生息地の保全</p> <p>アカガシラカラスバトの生息地を回復するため、ノネコを適切に排除する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アカガシラカラスバトの生息地の回復のため、ノネコ、クマネズミの駆除について検討する。 ・ネズミを餌としているノネコの捕食圧が、ネズミの減少により固有鳥類に向かう可能性があることから、クマネズミとノネコの対策との連携した対応を検討する。 	<p>了・拡大（～21年度末）】</p> <p>ギンネム【短期的には特になし】 シチヘンゲ【短期的には特になし】 ガジュマル【短期的には特になし】</p> <p>クマネズミ（再掲）</p> <p>ノネコ【短期的には特になし】 クマネズミ（再掲）</p>
弟島	<ul style="list-style-type: none"> ・弟島は、面積は比較的小さいが、一ノ谷と藍ノ沢という2つの谷地形を有し、同域には適潤かつ土壌化の進行した土地が存在する。 ・植生の主体をなしているのは自然林への回復途上 	<p>ムニンヒメツバキ自然林を中心とした弟島元来の生態系の維持・増進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・島の中央部に広く分布する自然性の高いムニンヒメツバキ二次林について、阻害要因を排除す 	<p>ムニンヒメツバキ林の健全な回復</p> <p>外来種影響を排除することにより、ムニンヒメツバキ自然林への回復を促していくとともに、オガサワラグワの生息地や海食崖上の本来の植生の回復</p>	

推薦後の短期目標として、（～24年度末）までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
	<p>にあるムニンヒメツバキ二次林(ムニンヒメツバキ - コブガシ群集オガサワラモクレイシ亜群集典型・タコヅル変群集)であり、島の中央部に広く分布している。この林は、乾性低木林の構成種を含むムニンヒメツバキ林として特徴的である。</p> <ul style="list-style-type: none"> これらのムニンヒメツバキ林は、固有昆虫類やアカガシラカラスバトといった森林性の生物群の生息や繁殖に適した環境となっている。 しかし、本来はムニンヒメツバキと同様に高木層の一部を構成していたと思われるオガサワラグワやシマホルトノキなどは現在では稀にしか生育が確認されていない。 オガサワラグワについては、シマグワと交雑していない純粋な個体群のまとまった生育地が広根山北西部の巨岩堆積地上にみられるのみである。 本来乾燥立地に成立する荒原植生、風衝草地、ハマゴウ群落、タコノキ群落等の植生に変わって、現在弟島で優占しているのは外来種のモクマオウであり、島の北部及び南部の海蝕崖周辺に広範囲で純林を形成している。 ノヤギとノブタが生息しており、植生や固有植物、陸産貝類等に影響を与えている。一方、かつて7ヶ所約400本のアカギが確認されたが、平成17年度に駆除を実施し、ほぼ完了した。 弟島はオガサワラアオイトトンボ(弟島のみに現存)、ハナダカトンボ、オガサワラトンボ、オガサワライトトンボ、シマアカネの固有トンボ5種がまとまって生息する唯一の島として重要である。 しかし、いくつか見られる池にはウシガエルが生息するとともに、近年の乾燥傾向のためか小雨の年には池が干上がるなど、トンボをはじめとする昆虫類に大きな影響を与えている。ただし、現在では、ウシガエルの根絶がほぼ完了した。 	<p>ること等により自然林への遷移を手助けし、ムニンヒメツバキ自然林を中心とした生態系を保全し、維持・増進していくことを目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> また、以上を通して、オガサワラグワなどの固有種の生育環境を保全していくことを目指す。 <p>固有トンボ5種などの固有動物種の安定生息</p> <ul style="list-style-type: none"> 外来種の影響の排除や繁殖地となる水辺の干渉対策等により、唯一固有5種がまとまって見られるトンボ類をはじめとした固有昆虫相や、弟島固有の陸産貝類などの固有動物種及びその生息地を保全し、安定的な生息を目指す。 また、弟島はアカガシラカラスバトの生息地でもあることから、生息地の保全及び安定的な生息を目指す。 	<p>を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ムニンヒメツバキ林の自然林への健全な回復を促すため、根絶作業済みのアカギについて、見落としたものを探すほか、生長した稚樹の引き抜き作業を数年後に実施する。 植生に影響を及ぼしているノヤギについては、駆除に向けた準備を進めており、根絶を目指して作業を実施する。 その他、モクマオウ・リュウキュウマツ、ギンネム、ガジュマル・シマサルスベリ・ソウシジュなどについては、当面実態の把握と手法の検討を行い、侵入の初期段階で広範囲に分布が拡大していないうちに、根絶を目指して、早期に駆除を開始する。 また、植生や陸産貝類に影響を及ぼすクマネズミの駆除を実施し、植生の健全な回復を図る。 <p>オガサワラグワの生育地の保全</p> <p>オガサワラグワの純粋な個体群を残す生育地を確実に保全する。</p> <ul style="list-style-type: none"> オガサワラグワにも影響を及ぼしているノヤギについては、上記に示したように駆除を実施する。 オガサワラグワの増殖に関する研究を元に、外来種の駆除状況を見ながら、必要に応じた生育地の確保と管理等を順応的に進める。 <p>固有トンボ類等の昆虫相の保護</p> <p>トンボ類に影響を及ぼす外来種への対策は着実に進められており、繁殖地など生息環境の回復を進め、固有5種の確実な保護を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 水辺の昆虫相の再生のため、ウシガエルの根絶を目指して駆除を行い、ほぼ根絶を達成している。今後も、継続的なモニタリングを実施する。 生息域を圧迫しているノブタについて、根絶を目指して駆除を実施しており、生息密度は低下している。 一方で、繁殖池の干上がりに備え、これまでも実施されているトンボ類の繁殖地の創出を継続実施する。 <p>アカガシラカラスバトの生息地の保全</p>	<p>アカギ【根絶作業完了】</p> <p>ノヤギ【根絶作業着手(～21年度末)】</p> <p>モクマオウ・リュウキュウマツ【短期的には特になし】</p> <p>ギンネム【短期的には特になし】</p> <p>ガジュマル【短期的には特になし】</p> <p>シマサルスベリ【短期的には特になし】</p> <p>ソウシジュ【短期的には特になし】</p> <p>クマネズミ【短期的には特になし】</p> <p>ノヤギ(再掲)</p> <p>ウシガエル【根絶作業完了】</p> <p>ノブタ【根絶作業完了(～21年度末)】</p> <p>トンボ類【止水環境の整備】</p>

推薦後の短期目標として、(～24年度末)までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
			<p>アカガシラカラスバトの生息地を回復するため、ノネコを適切に排除する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アカガシラカラスバトの生息地の回復のため、<u>ノネコ、クマネズミ</u>の駆除について検討する。 ・ネズミを餌としているノネコの捕食圧が、ネズミの減少により固有鳥類に向かう可能性があることから、クマネズミとノネコの対策との連携した対応を検討する。 	<p>ノネコ【短期的には特になし】</p> <p>クマネズミ（再掲）</p>
西島	<ul style="list-style-type: none"> ・西島は、父島に近接し、比較的面積の小さい島である。 ・ノヤギの食害や開墾などの影響を受けており、植生は壊滅的な状態となっている。特にモクマオウ林の分布拡大が顕著で、シマサルスベリも増加しており、その他、スズメノコビエなどの二次草地在り広く分布している。 ・一方で、<u>エンザガイ</u>をはじめとした固有の陸産貝類が多く生存し、オガサワライトトンボやシマアカネが確認されている。 ・ノヤギは残り一頭となっており、<u>オガサワラアザミ</u>などの増加も報告されている。また、クマネズミの根絶が達成されている。 	<p>長期的な視点での、森林植生や岩上荒原植生を中心とした西島元来の生態系の回復</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外来植物の影響を排除することなどにより、自然植生への正常な遷移を手助けし、西島本来の森林植生や岩上荒原植生を中心とした生態系を回復していくことを目指す。 ・また、以上を通して、固有植物や海鳥類などの生息・生育環境を保全していくことを目指す。 	〔検討中〕	クマネズミ【根絶作業完了】
東島	<ul style="list-style-type: none"> ・ノヤギの食害や開墾などの影響を受けており、植生は壊滅的な状態となっている。コトブキギクやスズメノコビエなどからなる二次草地在り見られ、その他にギンネムやタコノキなどの樹林が形成されている。 ・ノヤギの根絶後は、<u>ツルワダン</u>、<u>オオハマギキョウ</u>などの増加も報告されている。 ・<u>オナガミズナギドリ</u>、<u>アナドリ</u>といった海鳥類も営巣している。 ・過去の植生と比較してギンネム林の拡大傾向が見られ、また、尾根筋や海食崖を中心にモクマオウ類が侵入しつつある。また、最近クマネズミによる海鳥類の捕食やオオハマギキョウの食害が報告されている。 	<p>海鳥類の安定生息</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用による海鳥類への影響を監視し、海鳥類の生息環境を保全していくことを目指す。 <p>長期的な視点での、海岸植生を中心とした東島元来の生態系の回復</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外来植物やクマネズミの影響を排除することなどにより、自然植生への正常な遷移を手助けし、東島本来の海岸植生を中心とした生態系を回復していくことを目指す。 ・また、以上を通して、固有植物や海鳥類などの生息・生育環境を保全していくことを目指す。 	〔検討中〕	クマネズミ【根絶作業完了（～21年度末）】
南島	<ul style="list-style-type: none"> ・南島は、全島が石灰岩からなる隆起サンゴ礁であり、特徴的なカルスト地形が見られる。 ・ノヤギの食害や開墾などの影響を受けており、植生は壊滅的な状態となったが、ノヤギの根絶後 	<p>海鳥類の安定生息</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用による海鳥類への影響を監視し、海鳥類の生息環境を保全していくことを目指す。 	〔検討中〕	シンクリノイガ等【排除継続（～21年度末）】

推薦後の短期目標として、（～24年度末）までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
	<p>は、尾根筋や海食崖などを中心に樹林化が進んでおり、クサトベラやモンパノキなどから成る低木林が形成されつつある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・また、オガサワラアザミやツルワダンなどの増加も報告されている。 ・オナガミズナギドリ、アナドリといった海鳥類も営巣している。 ・主な侵略的外来種として、クマネズミやモクマオウ類、ギンネム、シマサルスベリなどの外来植物が確認されている。 ・なお、南島は小笠原における重要な観光スポットであるが、近年の観光客の増加に伴い、踏圧による植生の後退やシンクリノイガなどの外来植物の分布拡大などの影響が見られ、それらへの対応が行われている。 	<p>利用面をふまえた、長期的視点での健全な生態系の回復</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外来種の影響の排除に加え、利用者の影響のコントロールや、対策工の実施などにより、正常な遷移を手助けし、健全な生態系を回復していくことを目指す。 		
巽島	<p>〔整理中〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オナガミズナギドリやオーストンウミツバメの繁殖地となっている。 	〔検討中〕	〔検討中〕	【特になし】
母島	<ul style="list-style-type: none"> ・母島は、小笠原諸島のなかで父島に次ぐ大きさの島で、標高 400m 級の主稜部があり、標高 300m 以上では雲霧帯的性格を示している。全般に父島とは異なった湿潤な気候を有するため、独自の固有種をもち、また広域分布種も多いが、父島同様に開拓や人為的改変、外来種の侵入に伴う影響も強く受けてきた島である。 ・母島で最も特徴的な植生は、石門山付近にまとまって分布している湿性高木林(ウドノキ - シマホルトノキ群集)であり、小笠原の森林植生のうち最も発達した群落を形成し、セキモンウライソウ、ムニンミドリシダ等の希少な固有植物種の生育適地でもある。 ・また、モクタチバナ自然林(モクタチバナ - テリハコブガシ群集典型亜群集ムニンヤツデ変群集、モクタチバナ - テリハコブガシ群集典型変群集、モクタチバナ - テリハコブガシ群集ムニンヒメツバキ亜群集)は、母島の主体をなす植生で、島の中北部を広く覆っており、母島全体の植生の約 38% を占めている。 ・これら湿性高木林及びモクタチバナ自然林の存在 	<p>湿性高木林やモクタチバナ自然林などを中心とした母島元来の生態系の維持・増進【中北部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母島の生物多様性の保全上、湿性高木林が分布する石門一帯は、最も重要な地域である。 ・中北部においては、外来種の排除を継続的に実施し、周辺の森林についても自然林への正常な遷移を手助けすること等により、湿性高木林やモクタチバナ自然林を中心とした生態系を保全し、維持・増進していくことを目指す。 ・また、以上を通して、ヒメタニワタリ、タイヨウフウトウカズラ、セキモンノキ等の固有植物や、林内に生息する固有陸産貝類などの生育・生息環境を保全していくことを目指す。 <p>オガサワラシジミなどの固有昆虫相の安定生息</p>	<p>湿性高木林やモクタチバナ自然林の健全な回復</p> <p>母島元来の植生の健全な回復にとって、アカギが最も脅威であり、この影響を最小化していくことが最も重要であり、アカギの駆除を関係者が連携しながら戦略的に展開していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・モクタチバナ自然林や湿性高木林と、そこに生育する固有植物種を保全するため、根絶を目指しアカギの駆除を実施する。 ・アカギ侵入箇所の外縁部や低密度箇所は駆除効果が高いため、当面このような箇所や、重要地域での駆除を優先して進める。 ・具体的には西台・東台・衣館など北側や南崎・中の平などの南側から、また重要地域の石門一帯から駆除を行い、エリア排除を進める。 ・特に石門地域は固有植物や固有陸産貝類相をはじめとする固有種の生育・生息地となっていることから、これらの保護増殖を進めるとともに、外来種駆除等の事業実施にあたっては、これらへの影響を注意深くモニタリングしながら順応的に進める。 <p>固有昆虫相の保護</p>	<p>アカギ【中長期計画の作成（～21 年度末）】</p> <p>【エリア排除着手（～21 年度末）】</p>

推薦後の短期目標として、(～24 年度末)までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
	<p>は、雲霧帯を有する母島の湿潤～適潤な立地環境の特性を示すものである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・モクタチバナ林の存在により、母島には固有鳥類、固有昆虫類、陸産貝類といった森林性の生物群の生息や繁殖に適した環境が現在まで維持されてきた。 ・一方、母島ではアカギの侵入が著しく、1980年代には桑ノ木山付近にもまとまった湿性高木林が存在したが、現在ではアカギ林に置き換わっている。 ・アカギはモクタチバナ自然林をはじめとする他の植生域にも急激に侵入・拡大しつつあり、空中写真判読結果によれば、既にアカギが林冠に出現している林分は、現時点で母島全体の約15%に達している。 ・その他、近年はオオヒキガエル、グリーンアノール、ノネコ、クマネズミ、貝食性プラナリアなどの外来種の侵入による固有動物種への影響が指摘されている。 ・かつて諸島内に多数生息していたオガサワラシジミは、近年衰退が著しいが、母島には現在でも生息している。 ・南部は、母島内では乾燥傾向が強く、コバノアカテツ・ムニンアオガンビ群集とオガサワラヒロウ・タコノキ群集が本来当該エリアの主体をなす植生である。 ・しかし、これらの植生に外来種のモクマオウ林などが入り交じりモザイク状の植生分布を構成している。 ・南部は、沖合の属島と一体的に海鳥類の繁殖地やオガサワラカワラヒワの生息地となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・湿性高木林等の母島元来の植生保全と外来種影響の排除等により、オガサワラシジミ、オガサワラセセリなどの固有昆虫相の生息地を保全し、安定的な生息を目指す。 <p>アカガシラカラスバトの安定生息【石門一帯】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・湿性高木林生態系の保全・維持を進めるとともに、外来種影響を排除することで、アカガシラカラスバト及びその生息地を保全して、安定的な生息を目指す。 <p>オガサワラカワラヒワや海鳥類などの鳥類の安定生息【南部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外来種影響の排除等により、オガサワラカワラヒワなどの固有鳥類や、オナガミズナギドリなどの海鳥類の生息地を保全し、安定的な生息を目指す。 	<p>固有昆虫相に大きな影響を及ぼしているグリーンアノール対策を優先して実施する。全島での根絶は困難であるため、当面はエリア排除を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オガサワラシジミ、オガサワラセセリなどの固有昆虫相の生息環境の回復のために、大きな課題となっているグリーンアノール、オオヒキガエルの駆除を行う。 ・当面は、固有希少昆虫類の生息地と考えられる新夕日ヶ丘及び南崎に、保全・再生すべきエリアを設定し、防護柵を整備し、トラップなどを用いてこのエリア内での駆除を実施する。 ・オガサワラシジミの食樹の保護増殖や不法採集者のパトロール等、既に行われている取組を継続して実施する。 <p>アカガシラカラスバトの生息地の保全</p> <p>石門一帯はアカガシラカラスバトの重要な生息地として保全を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アカガシラカラスバトの生息地の回復のため、シマホルトノキなどの食樹となる樹木・植生の拡大を進める。 <p>固有鳥類や海鳥類の生息地の保全</p> <p>海鳥類を捕食するノネコをはじめとする外来動物や、生息地の植生等の健全な回復を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鳥類の生息環境の回復のために、ノネコの影響が懸念されるオガサワラカワラヒワや海鳥類の保護の観点から保全・再生すべきエリアを設定し、防護柵を設け、エリア排除を実施する。 ・ノネコの生体搬出を実施してきており、今後も必要に応じてノネコの捕獲を検討する。 ・なお、クマネズミとノネコは被食補食関係にあることから、クマネズミについても一体的に対応することも考慮する。 ・その他、南部地域の海食崖上で拡大傾向が見られるモクマオウについては、侵入の初期段階での先行的な駆除を実施する。 <p>遺産区域外での対策</p> <p>母島の玄関口である沖港及び居住・農業地域において遺産区域への影響を最小化するために各種対策を実施する。</p>	<p>グリーンアノール【エリア排除完了（～21年度末）】</p> <p>オオヒキガエル【エリア排除完了（～21年度末）】</p> <p>ノネコ【エリア排除着手（～21年度末）】</p> <p>クマネズミ【短期的には特になし】</p> <p>モクマオウ【エリア排除着手（～21年度末）】</p>

推薦後の短期目標として、（～24年度末）までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
			<ul style="list-style-type: none"> ・ネコをはじめとするペットの野外への拡散防止・適正飼養を行う。 ・沖港において、<u>ニューギニアヤリガタリクウズムシ</u>の侵入予防の取組を徹底する。 	<p>ネコ【適正飼養の普及啓発・飼養実態調査の実施】</p> <p>ニューギニアヤリガタリクウズムシ【侵入予防の継続】</p>
向島	<ul style="list-style-type: none"> ・向島は、小規模な台地状の島であり、周囲を切り立った海食崖によって囲まれている。地形的にも多少の起伏はあるものの比較的平坦な地形となっている。 ・母島属島の他の島々と異なり、かつて定住者による広範な開拓がなかったことから、人為的影響は比較的軽微である。 ・乾燥傾向が強く、台地上にコバノアカテツ - ムニンアオガンビ群集が広く分布している。このことで固有植物の生息環境も維持されている。 ・人為的影響が軽微だったこともあり、固有植物の生育地として極めて重要であり、向島でしか見られないムニンクロキをはじめ、多くの固有種が生育している。 ・オガサワラカワラヒワやハハジマメグロなどの固有鳥類が生息する。 ・主な侵略的外来種として、クマネズミやモクマオウ類、ギンネムなどの外来植物が確認されている。 	<p>自然低木林を中心とした向島元来の生態系の維持・増進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外来種影響の排除等により、島に広く分布する自然低木林を中心とした生態系を保全し、維持・増進していくことを目指す。 ・また、以上を通して、ムニンクロキ、オオハマギキョウ、ヘラナレンなどの固有植物の生育環境を保全していくことを目指す。 <p>オガサワラカワラヒワやハハジマメグロなどの固有鳥類の安定生息</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オガサワラカワラヒワやハハジマメグロなどの固有鳥類の生息地を保全し、安定的な生息を目指す。 	〔検討中〕	モクマオウ【エリア排除着手（～21年度末）】
姉島	<ul style="list-style-type: none"> ・乾燥傾向が強く、台地上にコバノアカテツ - ムニンアオガンビ群集が分布している。 ・一方で、かつての定住者によって広範な開拓が見られ、こうした人為的影響が現存植生に強く反映されており、リュウキュウマツ植林やモクマオウ植林が広く分布している。 ・シマムロ、オオハマギキョウなどの固有種が見られ、やや明るい疎林内の適潤地においてヒメマサキが確認されている。 ・また、オガサワラカワラヒワやハハジマメグロが確認されている。 ・主な侵略的外来種として、クマネズミやモクマオウ類、ギンネムなどの外来植物が確認されており、海食崖などの裸地域においてモクマオウ類の拡大が見られる。 	<p>自然低木林を中心とした姉島元来の生態系の維持・増進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外来種影響の排除等によって自然林への正常な遷移を手助けすることにより、自然低木林を中心とした生態系を保全し、維持・増進していくことを目指す。 ・また、以上を通して、シマムロ、オオハマギキョウ、ヒメマサキなどの固有植物の生育環境を保全していくことを目指す。 	〔検討中〕	【特になし】
妹島	<ul style="list-style-type: none"> ・かつての定住者による開拓の影響が見られるもの 	自然低木林を中心とした妹島元来の生態系の維持・増進	〔検討中〕	【特になし】

推薦後の短期目標として、（～24年度末）までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
	<p>の、台地上にコバノアカテツ - ムニンアオガンピ群集が広く分布している。このことで固有植物の生息環境も維持されている。</p> <ul style="list-style-type: none"> 中央部の頂部緩斜面でヘラナレン、その他にシマム口、オオハマギキョウなどの固有種が見られ、特に妹島は固有植物の生育地として重要であるといえる。 また、オガサワラカワラヒワやハハジマメグロが確認されている。 主な侵略的外来種として、クマネズミや、ギンネムなどの外来植物が確認されているが、モクマオウ林はみられない。 	<p>持・増進</p> <ul style="list-style-type: none"> 外来種影響の排除等により、島に広く分布する自然低木林を中心とした生態系を保全し、維持・増進していくことを目指す。 また、以上を通して、シマム口、オオハマギキョウ、ヘラナレンなどの固有植物の生育環境を保全していくことを目指す。 		
姪島	<ul style="list-style-type: none"> 乾燥傾向が強く、台地上にコバノアカテツ - ムニンアオガンピ群集が広く分布している。このことで固有植物の生息環境も維持されている。 中央部の頂部緩斜面でヘラナレン、その他にシマム口、オオハマギキョウなどの固有種が見られる。 姪島は、シマアカネ、オガサワライトンボの母島列島唯一の産地であり、オガサワラカワラヒワやハハジマメグロが確認されている。 主な侵略的外来種として、クマネズミや、ギンネムなどの外来植物が確認されており、特にアオノリュウゼツランの侵入が顕著である。なお、モクマオウ林はみられない。 かつての定住者による開拓の影響が見られ、耕作地跡における崩壊が目立っている。 	<p>自然低木林を中心とした姪島元来の生態系の維持・増進</p> <ul style="list-style-type: none"> 外来種影響の排除等により、島に広く分布する自然低木林を中心とした生態系を保全し、維持・増進していくことを目指す。 また、以上を通して、シマム口、オオハマギキョウ、ヘラナレンなどの固有植物や固有昆虫相の生息・生育環境を保全していくことを目指す。 	〔検討中〕	【特になし】
平島	<ul style="list-style-type: none"> かつての定住者によって広範な開拓、造林が行われ、それが現存植生に強く反映されており、テリハボク植林やモクマオウ植林が広く分布している。一方で、オガサワラススキ群落内などには、オオハマギキョウが見られる。 また、オガサワラカワラヒワやハハジマメグロが確認されている。 島の北側はサンゴ礁が発達し、海中公園地区となっており、海浜や海中の利用がなされている。また、この浜は小笠原最大クラスのアオウミガメの産卵地となっている。 主な侵略的外来種として、クマネズミや、モクマ 	<p>利用面をふまえた、長期的視点での健全な生態系の回復</p> <ul style="list-style-type: none"> ほぼ全域が人工林となっていることをふまえ、徐々に植林地での植え替えを進めることなどにより、現在も見られる海浜を中心とした利用とのバランスをとりつつ、長期的な視点で、元来の生態系を回復していくことを目指す。 	〔検討中〕	【特になし】

推薦後の短期目標として、（～24年度末）までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
<p>島名</p>	<p>オウ類、ギンネム、ガジュマルなどの外来植物が確認されている。</p> <p>・ 聳島はかつての森林破壊とノヤギの食害により、草地植生が現在でも島の大半を占めているが、現時点ではノヤギによる影響の完全排除が達成されている。</p> <p>・ 聳島には本来、適潤立地のモクタチバナ林が広範囲に分布していたと想定され、現在でも島内各所に面積的には小さいもののモクタチバナ林が残されている。</p> <p>・ そのため、ムコジマトラカミキリ、ツマベニタマムシ（聳島亜種）などの固有昆虫類の生息環境も維持されてきたと思われる。</p> <p>・ 固有植物種についてノヤギ排除後の回復傾向が報告されており、今後さらに他の固有植物種群についても回復が期待される。</p> <p>・ 一方、ノヤギの排除後に外来のタケ・ササ類が侵入し、拡大傾向を示している場所も見られ、他にもギンネム、アオノリュウゼツランも侵入している。また、クマネズミによる植物の種子や実生への食害も顕著であり、期待したほど既存の在来樹林の回復が見られない。</p> <p>・ 聳島列島はかつてアホウドリ、クロアジアホウドリの大繁殖地であり、乱獲により1930年代には両種の繁殖地は消滅した経緯があるが、1970年代になりクロアジアホウドリ（復活）とコアホウドリ（新規定着）の繁殖が確認されている。</p> <p>・ また、アホウドリの飛来が確認されていることから、聳島をアホウドリの新繁殖地とするために、2008年からヒナの人工飼育の取組が始まった。</p>	<p>モクタチバナ林を中心とした聳島元来の生態系の維持・増進</p> <p>・ ノヤギの排除後の植生変化を監視し、また現存する阻害要因を排除すること等により、自然林への遷移を手助けし、モクタチバナ林を中心とした生態系を保全し、維持・増進していくことを目指す。</p> <p>・ また、以上を通して、森林性昆虫であるムコジマトラカミキリやツマベニタマムシ（聳島亜種）などの固有昆虫類の生息環境を保全し、安定的な生息を目指す。</p> <p>アホウドリ類（アホウドリ、コアホウドリ、クロアジアホウドリ）の安定生息</p> <p>・ 聳島列島において現在繁殖しているクロアジアホウドリ、コアホウドリと、人工飼育の取組が始まったアホウドリについて、繁殖環境を保全し、安定的な生息・繁殖を目指す。</p>	<p>モクタチバナ林の健全な回復</p> <p>ノヤギの完全排除の効果を更に高めるため、森林回復を抑制しているクマネズミや、ギンネム、タケ・ササ類などの外来種の駆除を進める。</p> <p>・ ノヤギ排除後に分布が拡大傾向にあるギンネム、タケ・ササ類は、根絶を目指して駆除を実施する。</p> <p>・ その他、既に分布が確認されている外来植物（アオノリュウゼツラン、ダイサンチク、シチヘンゲ、ガジュマルなど）について、その「侵略性」を検討しつつ、必要に応じて順応的な管理を推進し、外来種の影響の拡大を適切に防除していく。</p> <p>・ ノヤギ駆除後に森林回復を阻害しているクマネズミについて、根絶を目指して駆除を実施する。なお、アホウドリ類等の海鳥への影響の可能性を最小化していくために、アホウドリ類がいない時期などに駆除を行う。</p> <p>固有昆虫類の生息地の保全</p> <p>上記の外来種駆除により森林回復を促すとともに、固有昆虫類の重要な食樹である在来植物の健全な回復を促進し、聳島特有の固有昆虫類の生息地を保全する。</p> <p>・ 重要な固有昆虫であるツマベニタマムシの食樹であるシマシャリンバイやヒメフトモモなどの母樹を確実に保全・回復する。</p> <p>アホウドリ類の繁殖地の保全</p> <p>現在取り組んでいるアホウドリの人工飼育を継続し、新繁殖地の試みを成功させる。一方で、阻害要因を取り除き、アホウドリ類の繁殖環境として保全する。</p> <p>・ 飛来が確認されているアホウドリについて、伊豆鳥島、尖閣諸島に次ぐ第3の繁殖地とするために、人工飼育等の取組を継続する。</p> <p>・ アホウドリ類の重要な繁殖地として聳島鳥島を含む聳島西部域について、繁殖地として順応的管理を進め、繁殖地を圧迫するシチヘンゲなど</p>	<p>ギンネム【根絶作業継続（～21年度末）】</p> <p>タケ・ササ類【根絶作業継続（～21年度末）】</p> <p>アオノリュウゼツラン【短期的には特になし】</p> <p>ダイサンチク【短期的には特になし】</p> <p>シチヘンゲ【短期的には特になし】</p> <p>ガジュマル【短期的には特になし】</p> <p>クマネズミ【根絶作業完了（～21年度末）】</p> <p>アホウドリ【新繁殖地の取組の継続】</p> <p>シチヘンゲ【短期的には特になし】</p>

推薦後の短期目標として、（～24年度末）までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
北ノ島	<ul style="list-style-type: none"> 北ノ島は、全体的に平坦で緩傾斜地の多い地形を示しており、鴛島よりも小面積である。 ノヤギの導入履歴はないが、かつての森林破壊等により、草地植生が島の大半を占めており、ソナレシバなどの草本群落を中心となっている。 本来、森林が広範囲に分布していたと考えられるが、<small>（要確認）</small>現在は樹林はほとんど見るできない。 オガサワラアザミの大きな個体群などの固有植物種が確認されている。 また北ノ島は、オナガミズナギドリやアナドリなどの営巣地となっており、特に稜線付近はこれらの海鳥類による植生破壊・裸地化が進んでいる。 主な侵略的外来種として、ギンネム、メダケ、ヤダケ、ホテイチクなどの外来植物が確認されている。クマネズミの生息は確認されていない。 	<p>海鳥類の安定生息</p> <ul style="list-style-type: none"> 北ノ島において現在繁殖しているオナガミズナギドリやアナドリなどの海鳥類について、繁殖環境を保全し、安定的な生息・繁殖を目指す。 <p>長期的な視点での、森林植生を中心とした北ノ島元来の生態系の回復</p> <ul style="list-style-type: none"> 外来植物の駆除等により、在来種による本来の植生回復を手助けし、北ノ島元来の森林植生を回復していくことを目指す。 	<p>の外来種の駆除について検討する。</p> <p>〔検討中〕</p>	<p>【特になし】</p>
媒島	<ul style="list-style-type: none"> 媒島は、全体的に平坦で緩傾斜地の多い地形を示しており、鴛島よりも小面積である。島の東端に位置する屏風山は標高155mで、鴛島列島最高峰である。 かつての森林破壊やノヤギの食害等により、屏風山の一角を除く全島が草地化し、スズメノコピエなどの草本群落を中心となっている。なお、ノヤギの食害に端を発する大規模な土壌流出が発生しており、周辺海域まで影響を及ぼしている。 本来、森林が広範囲に分布していたと考えられ、現在は、島の東端にウドノキ・ウラジロエノキ群落やタコノキ群落が残されている。 オオハマギキョウ、オガサワラアザミ、ハツバキやシマザクラなどが確認されている。 また、クロアシアホウドリやオナガミズナギドリなどの繁殖が確認されている。 主な侵略的外来種として、クマネズミや、ギンネム、メダケ、ヤダケ、ホテイチクなどの外来植物が確認されている。ノヤギは、根絶が達成されている。 	<p>アホウドリ類などの海鳥類の安定生息</p> <ul style="list-style-type: none"> 媒島において現在繁殖しているクロアシアホウドリやオナガミズナギドリなどの海鳥類について、繁殖環境を保全し、安定的な生息・繁殖を目指す。 <p>長期的な視点での、森林植生を中心とした北ノ島元来の生態系の回復</p> <ul style="list-style-type: none"> ノヤギの排除後の植生変化を監視し、また外来植物やクマネズミの駆除等により、在来種による本来の植生回復を手助けし、東端に残されているウドノキ林といった媒島元来の森林植生を回復していくことを目指す。 	<p>〔検討中〕</p>	<p>ギンネム【根絶作業継続（～21年度末）】</p> <p>タケ・ササ類【根絶作業継続（～21年度末）】</p>
嫁島	<ul style="list-style-type: none"> 嫁島は、緩傾斜地の多い地形を示しており、鴛島よりも小面積である。 	<p>アホウドリ類などの海鳥類の安定生息</p> <ul style="list-style-type: none"> 嫁島において現在繁殖しているクロアシアホウ 	<p>〔検討中〕</p>	<p>【特になし】</p>

推薦後の短期目標として、（～24年度末）までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
	<ul style="list-style-type: none"> かつての森林破壊やノヤギの食害等により、草地植生が島の大半を占めており、シマチカラシバなどの草本群落が中心となっている。 本来、森林が広範囲に分布していたと考えられるが、現在は樹林はほとんど見る事ができない。 コゴメビエなどの固有植物種が確認されている。 また、クロアシアホウドリやオナガミズナギドリ の繁殖が確認されている。 主な侵略的外来種として、クマネズミや、ギンネム、メダケ、ヤダケ、ホテイチクなどの外来植物が確認されている。ノヤギは、根絶が達成されている。 	<p>ドリやオナガミズナギドリなどの海鳥類について、繁殖環境を保全し、安定的な生息・繁殖を目指す。</p> <p>長期的な視点での、森林植生を中心とした嫁島元来の生態系の回復</p> <ul style="list-style-type: none"> ノヤギの排除後の植生変化を監視し、また外来植物やクマネズミの駆除等により、在来種による本来の植生回復を手助けし、嫁島元来の森林植生を回復していくことを目指す。 		
西之島	<p>〔整理中〕</p> <ul style="list-style-type: none"> 西之島は、火山活動によって形成された平坦な島である。1973年の噴火により現在の島の形ができ、現在でも周辺海域の火山活動が活発である。 島の歴史が浅く、孤立し、火山活動の影響を受けているため、植生は貧弱である。分布する植物や昆虫類は全て広域分布種で、小笠原における固有種や外来種は見られない。 海鳥については、アナドリ、オナガミズナギドリ、オーストンウミツバメ、カツオドリ、アジサシ類など、小笠原諸島で繁殖が確認されている種のうちの半数以上が繁殖している。 	〔検討中〕	〔検討中〕	【特になし】
北硫黄島	<p>〔整理中〕</p> <ul style="list-style-type: none"> 北硫黄島は、険しい海食崖に囲まれた楕円形の島である。最高峰は標高 792m で、山肌は起伏に富んでいる。山頂部は雲霧帯を形成し、独特の湿潤な環境を有する。 チギ - オオバシロテツ林が広く分布し、エダウチヘゴやイオウトウキイチゴなどの火山列島固有種をはじめとした多くの固有種が分布する。 また、オガサワラオオコウモリやオガサワラトカゲなどが生息する。 ネズミ類の侵入が確認されている。 	〔検討中〕	〔検討中〕	【特になし】
南硫黄島	<p>〔整理中〕</p> <ul style="list-style-type: none"> 南硫黄島は、険しい海食崖に囲まれ、伊豆・小笠原諸島の中でも最高峰（標高 916m）を持つ、急峻な円錐状の島である。山頂部は雲霧帯を形成 	〔検討中〕	〔検討中〕	【特になし】

推薦後の短期目標として、（～24年度末）までの対策を検討する必要がある。

島名	現状と課題（抜粋）	将来目標	対策の方向性	推薦後の短期目標（部会で検討中）
	<p>し、独特の湿潤な環境を有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過去に人間が定住した記録がなく、ほとんど人為的影響を受けていない。 ・雲霧の形成にともなって植生が変化し、山頂部では木生シダ林が分布する。 ・ホソバシケチダなどの南硫黄島固有種や、オオトキワイヌビワ、ムニンカラスウリなどの固有種が多く分布する。 ・オナガミズナギドリ、アナドリ、シロハラミズナギドリ、クロウミツバメなど多くの海鳥類の繁殖が確認された。 ・また、オガサワラオオコウモリやミナミトリシマヤモリ、南硫黄島固有の陸産貝類や昆虫類（ミナミイオウトラカミキリやミナミイオウヒメカタゾウムシなど）が生息する。 ・シンクリノイガの侵入・拡大が確認されているが、クマネズミの侵入は確認されていない。 			